

## 二 大内盛見の豊前入国と支配

**大内盛見の抵抗** 大内義弘が堺で戦死したとき、弟弘茂も堺城の一郭を守って戦っていたが、家老平井道と豊前守護職 助の諫めで降伏し、応永七年（二四〇〇）七月には、防長二国を与えられ、大内家督を

許された。留守を預かっていた弘茂の兄六郎盛見は、この幕府の処置に服さず、抵抗の構えを崩さなかった。大内弘茂が帰国すると、盛見はいったん豊後へ逃れ、翌年十二月二十六日、大友親世の支援を得て、長門府中へ渡海上陸し、同二十九日、下山城を攻めて、弘茂軍を破り、弘茂を自殺せしめた。

応永十年（二四〇三）、幕府は、大内介四郎入道道通に、安芸・石見の兵をつけて、盛見を討伐させようとした。同年四月、盛見は介入道を追い詰めて籠戸関（上関）に入水せしめ、安芸・石見の国人をも降して義弘の旧領を回復した。結局、幕府は防長二か国を盛見へ与えることで和睦した。

上洛した盛見は、足利義満の信頼をも回復して、応永十一年（二四〇四）ごろには、豊前守護職を与えられ、以後三〇年ほど在京して、將軍に近侍し、晩年には、公方御料国となっていた筑前国代官をも務めた。

義弘の乱のあとの数年間は、少弐貞頼に豊前守護職が与えられていた。しかし、応永十一年（二四〇四）、肥前・筑後の守護職をめぐる、九州探題洪川満頼と少弐貞頼・菊池武朝が合戦に及んだ。幕府は大内盛見・大友親世に命じて、九州探題



大内盛見の花押

を支援させ、豊前鳥越城（安心院竜王山カ）を抜き、田河郡香春岳や馬ヶ岳を攻略したが、猪岳（大坂山）の合戦で、大内方は前豊前守護代陶尾張守弘長を戦死させる苦汁を飲まされた。その功勞によるものか、豊前守護職を還補された。

### 国分寺領・宇

領国の支配を安定させた大内盛見は、応永十一年、国清寺

### 佐宮領の再興

を創建して、兄義弘の菩提を弔い、大内氏の氏神である氷上山興隆寺の本堂・二王

堂・鐘楼・上宮・山王社などを造立し、盛大に供養会を開催して、一族および防長二国の武士を集めて、い  
わば、大内氏に対する番役として奉仕させ、分国内の人心一致の精神的支柱とした（河合正治『將軍と守護―室  
町政治の地方視点よりの考察―』）。

豊前においても、国分寺領を再興し、一〇〇余年も荒廢に任せていた宇佐宮と弥勒寺の再興に力を尽くし、  
国内の武士をその造営や祭会に参加させて、大内氏の統制下に組み入れていった。

応永三十四年（一四二七）八月三日、新装なった宇佐弥勒寺金堂で、国分寺僧一〇人を招いて、一一〇人  
の僧による千部法華經の読經が行われたのも大内盛見主導による撫民政策の一つであった。

### 国人の被官化

大内盛見時代に、豊前では、築城郡代に吉岡大炊助種俊（当町吉岡を本貫とする在庁官人大蔵  
一族カ、『到津文書補遺』二八・二九号）、上毛郡代に荒卷掃部助行宗（宇佐姓友枝氏一族カ）、

下毛郡代に野仲能登守弘道を任じ、その被官を郷役人として、下地の打ち渡しや、紛争地の点定（没収）を  
行っており、宇佐郡でも、大内教弘のころ、宇都宮一族佐田氏を郡代としているように、国内の武士を郡代



大友親世の花押

や段銭奉行などの役人に任じ、大内氏の被官として、主従関係を強固なものとしていった。

### 大友孝親の乱

#### (三角島の乱)

大友親世が大内義弘の娘に生ませた長子孝親は、大友親著つぐの養子となっていたが、親著つぐとそりが合わず、家督が八郎持直へ譲られたことに不満で、応永三十三年（一四二六）

十一月二十九日、挙兵して、親著を殺害したと『九州治乱記』は述べている。

しかし、親著はその後一〇年以上も文書を発しているから死亡はしなかった。このとき、大内盛見は大軍を豊前東部へ集結させ、自身は鈴隈山（吉富町）に陣し、宇佐宮へ願文を捧げた。願成就のあかつきには参宮すると。大友孝親の乱の背後に盛見がいたと推測されている。孝親の挙兵が所期の目的を達すれば、豊前から大内軍が支援する手はずであったが、孝親がすぐ戦死を遂げたために、豊後侵入を思いとどまったのであろうと推測される。このことが、大内盛見と大友持直の対立の原因となった。

大内盛見は、三〇年近く在京して、將軍に近侍し、幕政にも参与したが、少弐・菊池・大友氏の蜂起によって、九州が危機に瀕ひんしているという九州探題渋川満直の知らせで、公方の許可が下り、帰国した。

このころ、盛見は国人の本領を安堵し、開所地けつしちを給地として預け置き、独自に段銭や人夫役を賦課して、一円領国化を進めた。応永二十五年（二四一八）八月、仲津郡中臣今男八町が宇佐宮一の御殿の定灯料所として寄進されているのも、盛見独自の権力行使の一例である。

### 盛見の敗死

#### と豊前国

防長豊石四か国の守護職を得て、強固な分国を形成していたかに見えた大内盛見が、もろくも、筑前・肥前の国境で戦死し、守護大名の弱点をさらけ出した。

『北肥戦誌』では「永享三年（二四三二）、大友一族である筑前立花氏の所領を、上意と称して押領したた

め、大友持直がこれを將軍に訴えた。大内盛見は、このため、將軍の勸気を受け、筑前国を追い出され、防州へも帰れず、肥前国へ行き、少弐満貞の子小法師丸に攻撃されて、上松浦へ落ち、更に筑前怡土郡萩原（二丈町）で、少弐軍に攻められて、大勢の家来とともに討ち死にした」と述べている。

『看聞御記』では三〇人が討ち死にし、中でも、杉七郎をはじめ杉氏一〇人、内藤・安富・益田・宗像・伊佐・吉田・平賀・山田・森・波多野らの重臣が一緒であったと記し、『満濟准后日記』には、盛見の戦死を聞いて、將軍が「言語道断の次第、天下の安危はこの事である」と語ったと記している。

永享二年末、大内盛見は將軍御料国となっていた筑前国の代官として、年貢二〇万疋（二〇〇〇貫文）を京都へ送って、都の人々を喜ばせた。

このころ、大内盛見は、大友・少弐・菊池勢と合戦を続け、やむことがなかった。恐らく公方料国の代官として、大内氏が、年貢や段銭の徴収を強行したため、筑前の国人や農民が反発し、大友・少弐氏と同一行動をとって、大内氏に対抗したものであろう。

「大友・菊池・少弐等、内々ハ土一揆同心風聞候歟」（『満濟准后日記』）と京都では噂した。大内盛見は、筑前立花城以下、大友氏の知行する所々の城をことごとく追い落としたりという報告であったが、六月、怡土郡萩原で自刃したという急報が京都に届き、幕府首脳を驚愕させ、その対策をあれこれと思案させた。

大内盛見の戦死で、豊前国でも大友・少弐軍が侵入し、守護代杉伯耆守重綱が長門国へ逃亡し、両国とも大内方の者は「一人もこれなし」（『満濟准后日



杉重綱の花押

記」といった状態となった。

京都へやって来た大友氏の使者の弁解では、「大内盛見が無理をしたのでこういうことになったのです。大友方から仕懸けたことではありません。これからのことは上裁に任せます。筑前国で前々より知行してきた所々を知行することだけで、そのほかのことは考えていません」というものであった。筑前国では、さすがの大内氏も、基盤がなく、地域的領主化を進めていた国人たちの反発に遭って、孤立してしまいう弱さを露呈したのである。結局、豊前・筑前は従来どおり大内氏が支配し、大友氏は筑前国の所領を元のように知行するということになった。

### 三 大内持世の北九州平定

**大内持世・** 永享三年（一四三二）六月、大内盛見が不慮の死を遂げたあと、盛見に嗣子が決めてなく、

**持盛の争い** 義弘の子である孫太郎持盛と九郎持世が家督の座をめぐって争乱し、そのため、分国が大いに動揺した。

幕府は御料国代官を自刃に追い込んだ大友持直を討伐することに決し、持直とかねてから不仲である大友親綱・同親隆、菊池氏、安芸・石見の国人に出陣を命じた。菊池持朝には筑後国守護職を与えた。

大内家督については、大内盛見が足利義持へ許可を求めていたのは、在京の大内氏代官内藤入道智得の申し入れによると、兄の持世へ長門・豊前・筑前の三か国を、弟の新持盛へ周防国と安芸国東西条、満弘の